

創学舎ニユース

No.262

9月24日(月)私立中高進学相談会

来る9月24日(月)に柏駅前前三井サンガーデンホテルにおきまして、私立中高進学相談会が開催されます。

NPO法人塾全協主催で、創学舎も加盟塾として、当日の運営を行います。

専修大松戸・流通経済柏等の説明会に加え、茨城・千葉・埼玉・東京の私立約60校が個別相談の形式で、受験生の疑問にお答えします。

詳細は、各教室で配布いたしますチラシをご覧ください。

多数のご来場をお待ちしております。

音読の效用

新聞紙上で既にご存知の方もいらっしゃると思いますが、中央教育審議会(文部科学相の諮問機関)の小学部会は、小学校の授業時間について、国語や算数などの主要教科の時間を全体として10%増やすことに合意したと8月31日付の各紙で報道されました。この措置は、二〇〇二年度から始まったゆとり教育の反省…学力低下に対する対策としてある一定の評価が与えられると思えます。

現場で教えている立場から言うと、基本的な計算力、漢字を含めた語彙力・読解力の低下、理科・社会を含めた一般的な知識などの不足は本当に実感しています。特に私は小学

生・中学生の国語も担当しているのですが、生徒たちの読むスピードが年々落ちていきます。

よく言われますように、国語は全ての教科の基本です。読む力がなくては、教科書を読んで理解することも出来ません。

また、高校受験・大学受験において読むスピードが遅いことは致命傷です。

仮に60分の国語の試験とします。A君はB君の2倍の読むスピードがあるとします。

B君は60分かけて文章を読み終えましたが、問題を解くことが出来ませんでした。かたや

A君は30分で読み終わり残りの30分でじっくりと問題を解くことができます。

単純に読書スピードだけでその生徒の国語の読解力を判断することは

危険ですが、おおむね読書スピードと国語の読解力は比例していきます。

この違いはいったいどこからくるのでしょうか?やはり、幼児から小学生までの間の読書体験の差といっても過言ではないと思

います。

そこで創学舎では、その一助として、大学受験部での「速読講座」、柏教室の「言葉の

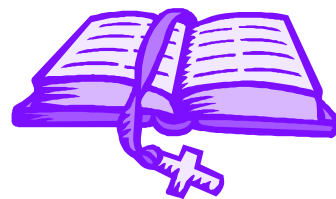
学校」、我孫子・新松戸教室の「わくわく文庫」の開設と、現在子供たちの読書離れに歯

止めをかけようとパソコン用のソフトを用い、積極的に読書指導を行っています。

このようなパソコンを利用したソフトを使わなくても、家庭で簡単に読解力をつける

方法があります。それは、音読です。名文と呼ばれる文章(教科書で可)を声に出して何

回も何十回も徹底して読むのです。試しにお



子さんに教科書を目の前で音読させてみてください。国語が苦手なお子さんは、読むスピードが極端に遅く、漢字も読めず、言葉を区切るところが違っています。1日5分でかまいません。毎日やることによって、国語の力は間違いなくついてきます。

実はこの音読の効果は、現在東北大学医学部教授の川島隆太氏が、「音読が黙読する以上に脳を活性化し、大脳皮質の6割から7割の領域が活性化することを実験で確認しました」と述べています。一九九九年アポロ1

号・人類初の月面着陸の際に同時通訳を務め、「同時通訳の神様」ともいわれた故人の国弘正雄氏(85)95年は参議院議員としても活躍)は、中学生の頃から、只管朗読(しかんろうどく)・・・意味のわかった英文(中学1年から3年までの教科書)を五〇〇〜一〇〇〇回音読…と言う方法で英語の勉強を

続けたのです。この学習方法は、科学的に効果の程が実証されずに否定する向きもあつたのですが、いみじくも川島教授が国弘氏の勉強方法の正しさを証明するようになりなりました。つまり音読は、言葉の学習・外国語の学習に大変効果があることがわかったのです。

声に出して読んでみる…単純なことですが、非常に効果があります。ぜひご家庭でも実践してみてください (白石)

薩埵峠(さつたとうげ)を往く

桜えびで有名な静岡県由比町は、東海道の宿場町があつたことでも知られている。ここから次の宿場である興津へ行く途中に、箱根・鈴鹿に並ぶ東海道三大難所、薩埵峠があ

る。私がこの場所を知つたのは、春ごろに観た旅番組の中であつた。そこで紹介されたのは息を呑む絶景。みかん畑の向こうには雪を頂に残す巨大な富士の山があり、その眼下には果てなくひろがる紺碧の大海原。白と橙と碧のコントラストの何と瑞々しく美しいことか。その撮影ポイントこそが薩埵峠という場所であり、浮世絵師の歌川広重が「東海道五十三次」の中でも描いていることを初めて知つた。以来、薩埵峠から望むあの景色への憧れは日ごと募り、8月某日、ついに実際に行つてみることにしたのである。

午前8時、由比着。宿場町を徒歩で巡る東海道ウオーキングが流行っているそうだが、さすがにこの時間には誰もいない。駅前案内所で観光地図をもらい歩き始める。行程は片道4キロほど。あの絶景ポイントを思うと相当の勾配を想像するが、しばらくは拍子抜けするほど平坦な道を進む。街道沿いは昔ながらの景観を保護している地区で、古めかしい木造家屋が連なっており大変風情がある。しかし、ふと左側に目をやれば、国道1号線と東名高速という日本の大動脈が併走して

おり、真っ青な駿河湾が一面に広がっている。この対照的なたたずまいが、妙な非現実感をもたらしてくれる。

峠まであと1キロ半というところで、初めての急勾配がやってきた(自動車で上るのも躊躇するような角度である)。登りきると、再び平坦なコースとなるのだが、もはや高速道も国道もはるか眼下となり、駿河湾、とい

うよりは太平洋の水平線と、みかん畑が続く。この日も晴天で、朝から陽射しは強かったが、みかんの木陰と目の前の絶景が疲れを感じさせない。

峠には見晴台がある。そこを駆け上がると、ついに夢にまで見た景色が眼前に現れた！最近覚えのなかつた感動だ。人がいないことをいいことに何度も叫んでしまう。

日本の自然が持つダイナミズムを目の当たりにした。おそらく自動車道を除けば、ほとんど広重のころと変わらぬ景観であろう。地元の子供たちは遠足で訪れるのである。か。私も、ぜひ塾生たちに見せたいと思った。というも…。

国語を教えていると、語彙力の低下にも増して、言語からイメージを喚起する力の不足を感じる。これだけ、視覚に対する刺激が氾濫しているにもかかわらず、だ。ひとつは情報に対する受動性に慣れてしまっていることがあるだろう。真に美しいものや感動できるものに出会ったとき、人は能動的にもものを見る。情報を積極的に得ようとする。そんな機会が決定的に足りないのではないか。

奇しくも、8月の中3の模試の国語では、黒川伊保子の文章をテキストに、相手のイメージを喚起するため



に言葉を紡ぐのが会話であり、相手の発した言葉に対する想像力にたけている脳が、頭の良い「脳である」という主張がなされていた。この主張を裏付けるように象徴的だったのは、次の設問が阿川弘之の小説(青年将校が大陸から被爆後の広島に復員するという内容)で、読み解けない生徒が大変に多かったことである。確かに平和な時代の中学生には難解だったかもしれないが、情景がイメージ

できないことよりも、苛烈な戦争を生き延びた主人公が、日本に帰るときにどんな気持ちでいるかを推しはかれない事の方が問題ではないだろうか。中3の保護者には、ぜひ参照していただきたい。

日本は美しい。そんな当たり前のことがやっとなるようになってきた。まだまだ知らない風景があることに気付いて、人生の残り時間と比べて少し慌てているこの頃である。(関)

Time Flies

猫の赤ちゃんを、生後何ヶ月かの間、真っ暗な部屋、横じまだけの模様の部屋、縦じまだけの部屋等で生育するという実験がある。脳と視覚の発育に関する実験だ。結果の詳細はここでは省略するが、その部屋の様子や猫が生まれてどれくらい経っているかという「環境と成長段階(タイミング)」が決定的に視覚に(視覚野に)影響する。

言語の習得を語るときも、ある言語が、その個人の母語として使いこなせるレベルになるかどうか(子どもはどのように言葉を学習するのか)に影響を与えるのも、環境と成長段階とされている。特に成長段階(時期)乱暴に言えば年齢(の)方は「敏感期、適時期」と呼ぶことが多い。「敏感期」という言葉が使われる前は、「臨界期」という表現が主流だった。しかし、この「臨界期」を過ぎても言語の習得は可能なので(人間の素晴らしいところだ)、母語として「自然に」習得するのに「敏感」な時期、というところで「敏感期」に変わってきている。確かに、「臨界」では

「リミット」という印象が強すぎる。ある時期を過ぎても、その後努力や苦勞を伴うが、習得可能、修正可能なことも多い。

ところで、我々人類は(大げさですが)、「臨界期」や「敏感期」という言葉を生み出すよりずっと前に、その存在、その概念には気づいていたのだと思う。小・中学時代の先生方は「臨界期」という言葉を(当然知りながら)持ち出さず、「鉄は熱いうちに打て」と言いますよ。」と、先人の言葉を用いて、早い時期の努力の大切さをやんわり伝えて下さっていた。高校の先生と先輩方はさらにプラスして、「若いときの苦勞は買ってでもせえ言うからの、オマエ、これやっつけ！」と物事に対する耐性を強化して下さったのだらう。大学に入るとさすがに「鉄は熱いうちに打て」と言います。さあ、みなさん、がんばって！という教授には出会わなかったかといって「さて、臨界期を過ぎた皆さん、このあとやること、できること、分かっていますよねえ？」と迎えられたらそれはそれで悲しい。(実際にはまだまだ未熟な段階なのだ)

自分がまだ、君達のように、青く、やわらかく、傷つきやすく、調子に乗りやすかった頃、ことわざや格言や校長先生の言葉なんて「昔の話でしょ。」という受けとめ方しかできていなかった。幼稚だったからだ。

最近はどうかと、「あ、またやっただか！やっばりそうなのか！」と両手で頭を抱えて唸りたくなる場面が多い。長い長い歴史の中から、生きること自体が大変だった、そんな暮らしの中から、選ばれ、抽出された格言やことわざは、古いだけではなく、古いのに淘

汰されず生き続けてきた生命力のある真理だ。真理であるのは確かだ、と思う今日この頃、そんな秋の夕暮れです。秋の夕日は「つるべ落とし」とむかし教わった(なぜか美術の先生に)。秋は夕方になってからの日照時間が短く、あっといふ間に暗くなる。これは、物理的要因もあるが、むしろ夏の夕方の明るさを感覚的に引きずっていると痛い目に遭うぞ、過ぎた夏は戻らないぞ、夏と秋は質が違つぞ、これからは時の経つのが早いぞ、という助言なのだろう(途中から受験生への脅し)。

最後に、受験生の皆さんに「またそれ？もういいよ！」と言われるのは分かっています。一言、「光陰矢の如し」(五日市)



創学舎の本



受験生は読め！(合格のテクニック)にみる勉強法・精神面のケアなどについて、創学舎講師陣が書いたものです。非売品です。希望者には無料で差し上げます。

愛の壁 お父さんお母さんあなたの愛は子供に届いていますか (著者 小林 憲右)

創学舎ニュースの編集責任者 小林が二十一年間書き続けてきた記事の中から抜粋・加筆したものです。

浅野書店・ブックス鈴木・新星堂他全国書店で発売中。

卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、「希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。」